

絶対飛行機

佐藤 信

人物たち（登場順）

わたし

彼

姉

弟

インタビュア

物売

放浪者たち

フクロウ

ツグミ

ハチドリ

モズ

ツバメ

カワセミ

オウム

旅行者

ガイド

小石を拾う老人

ヘスペルオルニス

教授

「執事」

鳥の神官

イクチオルニス

鳥の王

学生委員

ガイド

モーターのフロント係

妻

二〇〇一年九月十一日午前八時四十五分、ニューヨークの貿易センタービル北棟百階付近にアメリカン航空のボーイング七六七機が、同九時五分、南棟九十階付近にユナイテッド航空機が激突した。ツインタワーとして知られる同ビルは周辺の建物とともに崩壊、多数の死傷者を出した。その後、九時三十九分にアメリカン航空機がワシントンのアメリカ国防総省ビルに突入、十時十分にはペンシルバニア州にハイジャック機とされているユナイテッド航空機が墜落した。いわゆる「同時多発テロ」として全世界に喧伝されたこの出来ごとは、二〇〇三年三月にはじまったアメリカによる対イラク軍事介入への直接の引き金となった。

私と彼

振り返ると彼がいたおおきなガラス窓の向こう距離にすれば二十メートルこちらに向かってくる旅客機のコックピットで操縦桿を握っている彼は青ざめてはいたがとても冷静そうに見えた私はモーニング・コーヒーを入れたマグカップを手にしたまま一歩だけ窓の方に近づく／ねえ／そっちからも私が見える？

「ああ」

これは性交ね限りなく強姦に近い性交でもきつとあなたは射精は出来ないと思う／なにか言って／もう時間がない

「時間はある永遠に／だけど話すことはなにもない」

おはよう

「え」

朝の挨拶

「ああ／おはよう」

私

人は間違えるほとんど毎日間違えつづけているそれでもまあなんとかやっつけられるのは誰もが自分の間違いに気づかないせいだもちろん他人の間違いだって大抵は見過ごしてしまう世界はたぶん皆が思っているよりはずっといい加減で出鱈目で目茶苦茶でとりとめもなく途方に暮れていて

姉と弟

「あの人たちには決して逆らわないようになさいあの人たちの話す言葉にはなんの意味もありません／誰ひとり自分がなにを話しているのか理解してはいないので反論するのは莫迦げています反抗するのは下品です話しかけられたらたださりげなく軽く優雅に頷いてやるだけでいいそうすれば安心してあの人たちは行ってしまいます」

「駅員清掃係警備員警官市役所の役人売店の売り子発車する列車を待つ人到着した列車から降りてきた人出迎える人見送る人物乞い浮浪者外国人」

「そうですねあの人たちです／犬に餌をやりましたか？」

姉と弟（とインタビュア）

「お母さまがどうやって自殺なさったか話しておあげなさい」

「母は自分が所有していたすべてのダイヤモンドをワインで飲み干して自殺しました母は自分ひとりで何日もかかってそのダイヤモンドを粉に砕いたのです」
「本当の話ですわたくしは一部始終を見ていました八歳でした」

物売りと彼

「旅行かい？」

「ああ」

「どこから来た」

「どこからだろう／とりあえずドイツからだハンブルク」

「ドイツ人には見えないな」

「生まれたのはカフルシェイク」

「エジプトか」

「ああ」

「アレppoははじめてかい？」

「ああ」

「気に入った？」

「どうだろうわからないまだ着いて三日目だ」

「城へは？」

「三度行った」

「三度」

「毎日かよってるアレッポの城からはこの街全体が見渡せる街を眺めながら毎日考えてる」

「何を」

「わからない／だから考えてる」

「お茶もう一杯どうだ？」

「絵はがきを買おう」

「押し売りはしない今日は店じまいだ」

「一枚でいい／絵柄はあんたが選んでくれ」

放浪者たち（フクロウとツグミ）

「バスはとっくに行っちゃまったよ」

「知ってる」

「仕事は？」

「いいお天気じゃない／こんな日はなにか別なことをしなくちゃ」

「明日は天気が悪くてもお前は二度と工場へは入れてもらえないよ」

「明日も晴れよ／決まってる」

ガイドと旅行者（と小石を拾う老人）

「なにをしているかわかりますか？」

「さあ」

「毎日ですよああやって一日中道を掃除しているんです」

「身体の具合が悪いのかしら」

「どうでしょうなにしろあんな年寄りですから」

「昼間は相当暑いですよね道の照り返しもあるし」

「時々木陰で休んだりはしてますけど」

「掃除ってやっぱりここがお寺の参道だから？」

「たぶん」

「ずいぶんゆっくりとした動作ですね」

「ええ／＼はじめての人はしばらく立ち止まって見ていないとなにをしているのかわからないかも知れません」

「石を拾った」

「馬車が通りますから道路の石は危険なんです」

「あんな小さな石でも？」

「ちよつとしたはずみで馬車は簡単にひっくり返る」

「もう長いんですか？」

「長い？」

「あの人がこの道を掃除するようになってから」

「そう長いですねいつからとははっきりとは言えないくらい前から」

「近所の人？」

「いいえ汽車で三駅先の町に住んでいるという話を聞いたことはありますが本当かどうかはわからない／＼にか話してみますか通訳してあげますよ」

「話しかけてもいいんですか？」

「もちろんとても気さくでいい人ですよただしまともな答えは期待しないようにあの人の話は誰にも理解できないんです」

物売り

「たしかに俺はいまはなにも持っていないここには売り物はない俺はねあんたが考えているような物売りじゃないんだなんでもいいあんたの欲しいものを教えてくれついでにあんたがその物に支払える値段もね言い値で構わない一日か二日したら俺は間違いなくあんたにそれを売ってやるだろうただしそこのスーパーマーケットやコンビニエンスストアに行けば簡単に手に入るような物は駄目だ俺はただの使いっ走りの小僧ってわけじゃないんだから俺はあんたが欲しくてたまらなかつたけどちよつとやそつとじゃ手に入れられないような物あんたがいままで望んでいながらどうしても買えなかつた物をあんたに売つてやる物売りなんだよあんたはただその物の名前とあんたがつけるその物にふさわしい値段を俺に伝えればいいんだ／＼いまさらここであれこれ考える必要はないだろうあんたにはふだんから思っていたそんな物がたしかにあったはずじゃないかあんたが買いたいと望んでもどこにも売っていないようなあんたのとつ

ておきの欲望を満足させてくれるようななにかが俺のような物売りにいままで一度も出会わなかったせいであんたがもう手に入れるのを半分あきらめかけているのかも知れないなかだよ／あんたはそうやって身構えていたいなにを考えてるんだ俺を疑っているのかい別に構わないよありふれたことさどんな商売でも買い手は売り手を最後まで疑いつづけるものだからね取り引きのはじめから終わりまでいや取り引きが完全に終わって二度と会わないかも知れない売り手と別れた後になってさえ買い手は売り手を疑いつづける俺にはわかってるあらゆる物の真実の値段ってやつは結局のところ買い手には永久に隠されたままなんだそいつをつきとめようと思ったら膨大な時間と労力を覚悟しなくちゃならないその上成功はおぼつかないつまりそういった類のことがいつでも買い手になにかひどく不当で疑わしい感じを与えるんだよ手に入れた物が本当に支払った値段に見合う物かどうかなんて買い手には決して判断できないしまたするべきでもない／だけどさその意味でならあんたは俺を疑いの目で見る必要はこれっぽっちもないんだけどねあんたが望んでいる物がなんであろうと値段をつけるのは買い手のあんたの方でたとえそれが不当に安い値段だったとしても俺は黙って受け入れるよ俺は買い手相手に売り物の値段のことで余計な駆け引きをするつもりは全然ないんだ物に見合った値段が支払われるかどうかはつまり買い手の品性にかかわる問題であって売り手の俺にとってみれば買い手に対して相応の敬意を払うのかそれとも軽蔑してやるかくらいの意味しか持っていないのさ俺のこのやり方では買い手にとってもそれは同じことで要するに買い手は自分自身の品性を賭けてたつたひとりでも自分を相手に値段を決める駆け引きをやらかすことになるわけさ／まさか欲しい物がひとつもないなんて情けないことを言うつもりじゃないだろうねいままさにこの瞬間俺のような売り手に出会うことを夢見ている何百万人の買い手のことを少しは想像してみるよそんな想像は大袈裟に思えるかも知れないが俺がこんなふうに言うのはあんたのためを思うからで俺の方がいまここであんた相手になにがなんでも商売を成り立たせたいからじゃないってことはわかってくれよあんたとはいまはこうしてたまたま出会ってしまったてはいるけれど俺の商売相手は別にあんたひとり決められてるわけじゃないんだから俺はたったいま黙ってここを立ち去ることも出来るしそうしたらこれから先のある日あんたがようやくこの真実に気

づいてどんなに後悔してももう完全に手遅れってわけさあんたがいくら探しまわっても俺を見出すことは出来ないだろうしたまたま偶然に出会ったとしても俺がいつまでもこんな商売をつづけているかどうかはわからないその時の俺がどこか外国のメーカーのワゴン車を専門に取り扱うようなごくありきたりのセールスマンになつていたとしても俺の方にはあんたから文句を言われる筋合いはなにもないんだわかったろうだからいまここでなんだよいまなら俺ははっきりとあんたに言つてやれる俺はいままさにあんたに物を売ろうとしている物売りだあんたはあれこれ迷つたりしないであんたが俺から買いたいと望む物とあんたがその物につける値段とを正直に俺に伝えるんだ」

弟（とインタビュア）

「貴族の家系では代々優れた猟犬を厳しく躾けて手許に置きます血統の正しい犬を飼うことは貴族の家に生まれた者にとつてもつとも重んじられる誇りでありまた義務でさえあるのです／ドーベルマンですここにいるのは三匹ですが他にもう二匹」

第一の歌

馬の見る夢のように
月が碎ける 夜に降る
青いベールで顔を隠し
裸足の男たち 踊る
女たちは銃を背負い
祈りの言葉 真似る

馬よ眠れ
花は咲く
男たちは叫ぶ
花は咲く
女たちは孕む
花は咲く

森は花盛り

生まれなかった子供たち

森は花盛り

殺された馬よ

ヘスペルオルニス

「理由はありますよ第一にぼくはあと十分でこのピザを配達しなければならなかった第二にお前はぼくが親元を離れてひとり暮らしをしている理由とか昼間バイトのない時に学校へも行かずになにをしているかとか下らない質問をしつこくした第三にぼくは信号無視はしていない第四に自転車で追いかけてきたお前の呼び子で停車しなかったのはスクーターのブレーキがいかれていたからでぼくは逃げようなんて思っていなかった第五にどっちみちお前はぼくの言い分をちゃんと聞くつもりがなかった第六にぼくは武器をもっていた第七にお前は制服を着ていた第八に人気のないこの裏通りでお前は急に莫迦みたいな大声を出した第九にお前はぼくよりもずっと優秀な武器をもっていたまだ理由が聞きたいですかぼくが自分の武器をお前にちらっと見せただけでお前は自分の武器を使おうとしたぼくは自分の武器でお前を刺したこの武器は小さいけれども使えばとても役に立つあと始末は自分でして下さいお前は連絡用の無線機を持ってる」

教授と彼

「論文は？」

「順調です／夏休み前にもう一度シリアに行こうと思っているんですが」

「図書館の本にはなにも書かれていない／本は嫌いか？」

「子供の頃は一日中サッカーばかりしていました本なんて一冊も読んだことがなかったその頃といまとなにが変わっただろうかと考える時があります」

「遺跡の発掘で見つかった一かけらの土器の破片がそれまで書かれた何百何千という書物の内容をいっぺんにひっくり返してしまうことがあるそして私に言わせればそれこそが書物の価値だ本というものはね人間がおかした過去のあら

ゆる誤りの正確な記録なんだよ」

放浪者たち（フクロウとツグミとハチドリとモズとツバメとカワセミとオウム）

「耳に穴をあけていればかならず天国に行ける」

「人の影が落ちた食べ物は何に食べてはいけない」

「猫はもつとも穢れた生き物だなぜなら猫は自分の舌で身体を舐める」

「ハリネズミは恐ろしい夜の闇にも免疫があるハリネズミを食べると解毒剤になる」

「ハリネズミには二種類ある豚の顔をしたハリネズミと犬の顔をしたハリネズミだ豚の顔をしたハリネズミは食べられるが犬の顔をしたハリネズミは食べられない」

「行商は女の仕事男は馬と馬車とを用意する」

「死んだ人の持ち物はその人と一緒に埋めてしまわなければならない私のいとこは鏡の前に置き忘れられた死んだ父親が使っていた髭剃りブラシがびよんびよん跳びはねているのを見たことがある」

私（と彼）

自分のことを話したい私はもうすぐいなくなってしまうだからどうしても自分のことを話しておきたいあなたは私の話を聞かなければならないあなたに興味があるうとなかろうと本当は私だけではなくいまあなたが間違ひなく抹殺しようとしているすべての人の話をあなたは聞くべきだと思ってもしもあなたが言う通りこの先私たちには永遠の時があるのだとすればその永遠の時はそんなふうに使われるのがもつともふさわしいと思わない？／いまさらあなたを非難したり取り乱して泣き叫んだりするのは莫迦げているそんなことはどうせいつまでもつづけられっこないしひとしきり騒ぎまわったあとはかえって自分の方が虚しい気持ちになるのはわかりきっているあなたは窓の外にあらわれて一瞬のうちには自分が何者であるかを私に語りかけてきた強引で一方的なやり方だったけど理解したかどうかは別にして私はそれを受けとめた無理やり受けとめさせられた話すことはなにもないとおあなたが言うのは当然かも知れないあなたの方はもうすっかり結論まで話してしまつたつもりになつても私は違う私はまだ

ひと言も話をしていないしそれどころかきちんと話すための準備さえ出来ていない考えをまとめる暇も与えられずにいきなりあなたと向き合わされたばかりでも話す私が何者であるかそれをあなたに話してあげる／名前生年月日現住所その他パスポートをもらうための書類に書き込むみたいなことはどうでもいい生い立ちとか家族とか学生時代の話もしたくないそんなお喋りはきりがない思いう出というのははっきりとしていけばいるほど自分でもぞつとするほど上手な作り話になってしまふそんなことをいくら喋っても私がどんな人間なのか絶対に伝えられないと思う私はもつとなにか単刀直入な話し方で自分のことを話したいたとえば私は「見る人」／「話す人」でも「聞く人」でも「読む人」でも「作る人」でもなく私は「見る人」だったそれから「待つ人」他人にはどう見えていたかはわからないけれど私はいつも「見て」「待つて」「いたわそれから」「笑う人」「買い物が早い人」「夜更かしというよりは早起きな人」「ゆっくり歩く人」「でも他人よりはあきらかに転ぶ回数が多い人」「男の人とも女の人ともセックスする人」「約束の時間を守る人」「青い色が好きな人」「だから自分の家にはなるべく青い色のものは置かないようにしている人」「映画館で飲んだり食べたりしない人」「現代美術が嫌いな人」「いろいろなデモやパレードに誘ってくれる友人が多い人」「星占いを信じない人」「神様を信じない人」

インダビュアと「執事」

「廃墟のような屋敷ですね」

「廃墟ですあなたが取材に見えるのであの方たちはここを選んだ」

「あの人たちここには住んでいないんですか？」

「一週間という期限つきで管理している役所の使用許可をもらったんですあの方たちの住まいは中央駅の三等待合室ですこの二十年間はずっと」

「それ以前は？」

「知りません」

「長いことこの家の執事をなさっているとうかがったんですが細かなことはすべてあなたがご存じだぜひ一度あなたのことも取材するようにと」

「私はなにも知りません」

「執事の守秘義務ですか」

「いいえ私は三日前に三匹のドーベルマンと一緒に雇われました本職は役者ですしかしまだ台本をもらってない」

「あなたはこの家の執事じゃないとおっしゃるんですか？」

「渡された台本に私の役が『この家の執事』と書いてあれば間違いなく私はこの家の執事です／けれども生憎私は台本をもらっていない私にその質問をなさつてもいまは答えできない」

「わかりました明日もう一度インタビューをお願いすることにしましょう」

「構いませんが私には話すことはありません」

「大丈夫ですあなたの台本はこちらで用意しておきます」

「取材には相応の謝礼を請求させていただくことになると思いますが」

「いいですよ」

鳥の神官と鳥の王

「賢き鳥の王よ／そなたには定められた五つの行いがある神への信仰を口に出して唱えること太陽のめぐりに従って祈りの時を欠かさないこと財産のうち定められた割合を貧しき者たちに施すこと暦の九の月には陽のあるうちは一切を口にせず身をきよめつつしむこと十二の月には聖地への巡礼をおこなぬこと」

「尊き鳥の神官よ／余は定められた五つの行いをつつしんでまもり余の治世の平らかならんことを願う」

「幸いなるかな賢き鳥の王よ神はわれら鳥の一族にこぞって天空をはばたくことを許されたもうたかくの如き恩寵を下されしわれらこそ神の御名を唱え神の御名のもとに混沌の大地を離れいや久しく清浄なる天の息吹とともにある」

学生委員と彼

「学内サークルに登録していますか？」

「いいえ」

「まず登録が必要ですよこの書類に必要な事項を記入して提出して下さい」

「他に方法はないんですか？」

「ありませんこの建物のすべての部屋は私たち学生委員会が管理しています部屋を使えるのは登録された学内サークルだけです」

「難しい書類じゃありません私たちは審査のようなことをするわけではないし部屋の使用目的責任者の名前と連絡場所サークル・メンバーの名前がわかればそれでいい」

「リーダーはぼくですがいまのところメンバーはそんなに固定していないんです」

「メンバーに学外の人はいますか？」

「いません全員この大学にきている留学生です」

「だったらその中の二、三人選んで名前を書いておいて下さい」

「わかりましたありがとうございます」

「部屋はお祈りに使うんですね」

「ぼくたちには必要な部屋なんです」

小石を拾う老人（と旅行者とガイド／ガイドは旅行者の荷物からカメラを盗む）

「わしは若い頃一度象になったことがあるよ楽隊を大勢引き連れてたくさんの花やきれいな色の織物に飾られてのっしのっしと町を練り歩いたいまでもわしは時々象の目でいろんなものを眺めてみるんだたとえばわしの目にはあんたはこのあたりでよく見かける気立てのいい男であんたはどこかよその国からやって来た若い女の人に見えるわしの目はもうすっかり弱ってしまっただんやりとしか見えないがまあそのくらい区別はつくけれども象の目で眺めるとねあんた方はまるつきり違って見えるんだよ象の目で眺めればあんた方はサラの木だ二本足で歩くとてもよく似たサラの木だサラの木なのになぜ足を生やしているのか他の木のようにひとつのところにじっとしていないで何故うろろと動きまわるのかそれは象にはわからない」

姉（と中央駅三等待合室の人びと）

「ここでは私にお辞儀をする人はひとりもない／召使いたちは屋敷の中を移動する時には途中で誰に出会っても困らないようにいつも頭を深く垂れて注意深く目を伏せているように厳しく躡けられていた西からは毎年のように海を渡って使節団がやってきた彼らはキイキイとまるで小人猿の歯ぎしりのような声で轉る時計仕掛けの雲雀とか遠くの天体にある死んだ山を見るための望遠鏡と

か金や宝石で安っぽく飾りたてられた不恰好なピストルとか子供の玩具にもならないような贈り物を持ってやって来た屋敷の地下室にはそんな贈り物が山ほど押し込んである湿っぽい小部屋があった小部屋の天井からはわずかに石灰分を含んだ雫が絶え間なくしたたり落ちていて床に積み上げられた贈り物はその雫を受けて錆びたり腐ったりしながら長い時間をかけて半透明の石の塊の中に封じこめられていった東からは百年に一度の割合で將軍たちが軍勢を率いてやってきた彼らが砂漠の向こうから何百本もの旗を押し立てて喇叭だの銅鑼だの太鼓だのと騒がしく姿をあらわす度に屋敷の女たちはやって来る將軍の髪の毛や肌や目の色について賭けをして遊んだ燃えるような赤い髪みがきあげられた青銅色の肌深い井戸の底よりも暗く真っ黒な目をした二十歳を越えたばかりの若い將軍もいた彼の髪の色肌の色目の色は誰にも言い当てられなかった女たちが賭けに使った白い貝殻はすべてその若い將軍に渡された將軍はこれまで誰も見たことのない丁寧で優雅なお辞儀をして貝殻を受け取ったそのようなお辞儀の仕方が彼の一族の習慣によるものだったのかそれとも彼ひとりが身につけていた独特なやり方だったのかはわからなかった私は一度もお辞儀をしたことがなかった神に祈る時さえ頭を下げなかったそのことで多くの人から何度もそれとなく忠告を受けたしありとあらゆる不当な陰口が囁かれているのも知っていたけれどもこれは私が自分で選んだことではなく私が生まれた家系のせいだった私の一族は決して他人には頭を下げないという教えをまもりつづけてエブラの文書に書かれている四千年の昔から絶えることなくこの都に生きてきたこれは私の身体を流れている血にしるされている掟だった／四千年の間に都は繰り返し炎に包まれたその中にはあのこの上もなく丁寧でこの上もなく優雅なお辞儀をする若い將軍の軍勢が放った炎も含まれていた將軍が率いていたのは勇敢ではあるけれど北方の野蛮人たちにも負けないほど残酷な軍勢だった兵士たちは直接建物を焼き払うかわりに建物の持ち主に自分の手で火をつけさせたそして十分に火がまわったのを見届けてから建物のすべての住人を集めて身体に油を浴びせると中に放り込んだけれどもどんなにむごくてどんなに激しい炎もこの都を完全に焼きつくすことは出来なかった都が燃え上がる度にこの都の建物を繊細な彫刻で飾る白檀や黒檀の香りがあたりに漂いその香りは丘の上にある屋敷にまで届いた泣き叫ぶ人びとの声さえ聞こえなければ香木の香りに包まれ

て燃える都はたとえようもなく優美でことに夜の闇の中ではどんなに見つづけていても決して見飽きることはなかった」

放浪者たち（フクロウとツグミ）

「古着を売りに行く時はあたりをよく見まわしてからそおっとドアをノックするんだよ一軒家で裏口がある時はかならずそっちから」

「泥棒みたい」

「古着を買ってくれる貧乏人ほどね隣近所の目をとでも気にするもんなんだよ」「いくら貧乏でもあたしたちから古着を買う人なんてもうどこにも居ない」

「それはわからないさあの人たちは私らとは違ってめったに自分で服を作らないからね」

放浪者たち（カワセミとオウムとモズ）

「ひでえ臭いだ明日一日は女は抱けないな」

「臭いをとやかくいうような女とはさっさと別れちまえばいい」

「いいこと言うね俺も女の臭いは気にしない」

「当たり前だお前はもともとゴミだからな」

「でもまだ腐っちゃいない」

「ほんと腐ったゴミばかりでガラス瓶なんてどこにもありやしない／あった」

「小さいのは駄目だぞ小さい瓶は他に専門の連中がいる薬瓶とか香水のとか」

「ワイン瓶にもろくな値がつかない」

「九百本か夜が開けちまうな」

「百本集まったら車に運ぼう」

「キノコ狩りの方がずっとましだ」

「俺もそう思うんだけどキノコなんてどこに生えてる？」

ヘスペルオルニスとイクチオルニス

「天からとてつもなくでっかい火の玉が降って来るんだよ」

「頭が変なんだわまともじゃないわよあんたなんかただのピザの配達人であるたの乗ってるあの不恰好なスクーターと同じで全速力で走ったってたいしたこ

とないんだから」

「六万五千年かそれよりもっと前の話だよ恐竜はみんな死んでしまう」

「ピザを食べるのはやめてチーズの臭いでむかむかするそれにあなたのピザじゃないじゃないあなた配達の途中なんでしょう？」

「恐竜の種類は五百種類もあってこの星のあらゆる場所で一億五千万年も生きてそして滅びる」

「そんな血だらけの手でよく平気でピザなんて食べていられるわね」

「アンモナイトも滅びる」

「もうすぐ警察来るわよ電話したんだから」

「ぼくは地面は走らない空を飛ぶんだ」

第二の歌

眠ればいい 夜はまだ来ない

人だらけの砂漠 眩しすぎて

風は吹かない

蜃気楼もない

祈りの言葉も歌もない

だから 眠れ 歩きながら

だから 眠れ 裸のまま

眠れ お前よ お前よ 眠れ

夜はまだ来ない 朝もまだ来ない

眠ればいい 朝はまだ来ない

夢まみれの荒地 凍りついて

馬車の轍も足跡もない

約束の場所も

地図もない

だから 眠れ 笑いながら

だから 眠れ 目覚めを待たず

眠れ私よ 私よ眠れ

朝はまだ来ない夜もまだ来ない

教授と物売り

「君はこの町によく似合うよ石鹼の匂いがたちこめるスークの迷路で私は君のような人に出会うのを予感していたのかも知れないどちらにしても私はここではよそ者なんだから君たちのやり方には逆らわないつもりだよ君たちの言い分がなんであれ最後まで注意深く耳を傾けて途中で逃げ出したりはせずに来るだけ期待にそいたいとも思っているただわかって欲しいんだ私には君の言葉がほとんど理解できないほとんどというかほぼ完全に理解できないと言った方がいい私は語学の専門家ではないそれでも自分の研究分野に必要な外国語は学生時代からそれなりに習得してきたつもりだこの町に来てからもドイツ語や英語ではなくすべてこの言葉で不自由なく用を足してきたそれなのに君の言葉はなにも理解出来ない君は私に向かってなにか訴えかけようとしているただの世間話や冗談ではないもっと切実なあるいはもっと切迫したなにかだそれはわかる／けれども私には君が説得したいのか懇願しているのか脅迫なのかそれとももっと別のたとえばどうしても私に知らせたい事実を伝えたいのかそれさえ判断できないんだよ」

「そうか／わかったよあんたは俺に言葉を買って欲しいんだな？」

「私は大学で建築を教えている建築といっても建物ではなくて都市が専門だ歴史のある古

い都市の再開発を研究している」

「心配しなくていい俺にはあんたの言葉がちゃんと理解出来るよ／あんたに言葉を買ってやろう」

「都市はそこに住む人間と彼らの生活をつくる古い都市の遺跡は町外れの瓦礫の中よりもそこに暮らす人間のこころの中に残されている君はオリーブ石鹼と香辛料をうず高く積んだ店が軒を並べるこのスークに似合っているんじゃない君はスークの迷路だ迷路そのものなんだ」

「値段を決めてくれあんたは俺にいったいいくら払う？」

私と彼

引き返せたらって思う？

「ほんとうにいい天気だ」

話をそらさないで

「引き返す／どこまで？」

そうねそれは問題ね私たちはどこまで引き返すのか引き返せばいいのか

「ぼくたちは引き返さないここでおしまいだ」

まだ終わっていないあと二十メートル永遠の時って自分で言った

「とまった時間をいくら積み重ねてもなにも生まれえない」

でも見ることはできる

「なにを？」

たとえば立ち止まって後ろを振り返ってみる私は時々街でやってるおかしい癖だ
だって友だちにからかわれたけど

「ぼくはひとりだ振り返っても仕方がない」

私もひとりだからいつでも振り返る

インタビューアと弟と「執事」

「姉は二百歳を越えています姉の話はどれも本当のことです信じる信じないはあなたの勝手ですが」

「あなたはお幾つですか？」

「今年で三十四になります」

「二百歳のお姉さまと三十四歳の弟さん／ご両親は？」

「知りません私は六歳の時にひどい病気にかかってそれ以前の記憶がまったく
ないんです記憶が戻ってから私は姉に育てられました姉は私のたったひとりの
身寄りです」

「二十年間駅の待合室で暮らしていらっしやるんですよね」

「他に行くところがありませんあそこには屋根があります」

「待合室の前は？」

「町外れの丘にあった昔からの屋敷に住んでいましたいまは壊されて跡形もあ
りませんがここよりもずっと広くて立派な建物でした」

「あなた方があそこを追い立てられた日のことはよく憶えていますよ」

「軍隊が出動しそうになりましたでも騒いでいたのは私たちを追い立てた人たちの方です私たちは命令に従っておとなしく家を出ました姉はなにひとつ取り乱さなかったし私や使用人たちも決して物音をたててはいけないと厳しく姉から言われていましたから」

「犬を放したんですよ」

「住む家のない私たちは犬を連れて行くわけにはいかなかった」

「四十匹もの狂暴な猟犬ですよ狂犬病にかかっているという噂がひろまってね子供が何人も嘔まれたりしてそりやもう大変な騒ぎだった」

「待合室に住むようになって生活はどうなさっていらっしやるんですか？ 毎日の食べ物とか」

「食べ物があれば私たちは食べます食べ物があれば私たちは食べない何日でも」

「施し物があるんですね」

「いいえ私たちは乞食ではない」

「残飯の拾い食いですよこの人たちに食べ物をやろうなんて誰も考えませんつまらない同情したばかりに不愉快な思いをさせられた人がいままで何人もいますからね」

「姉も私も飢えを知りません飢えというのは貧しいひとたちのものです私たちには飢えは

許されていないのです」

ガイド

「象よ教えて欲しい私はこの近くの寺に植わっていたサラの木だお前も知っている通りあの寺は『朝日の寺』と呼ばれている夜明けに東の空に昇ってくる太陽を背にしてそびえ立つあの寺の荘厳さには誰もがこころを奪われる何十年何百年あるいは何千年のあいだ私はあの美しく厳かな寺と共にあった象よ私たち木や草には長い時の記憶がない木も草も一年に一度かならず生まれ変わるどんなに年老いた木も季節がめぐれば全身に瑞々しい若葉を生い茂らせるその時木々の記憶もまた新しく生まれ変わるのだから私にはあの寺に生えていた頃

の古い記憶がない象よどうか教えて欲しい私は何故あの寺を追放されたのか私はどんな罪をおかしどんな償いをすれば許されるのか象よ罰として与えられたこの二本の足で私はどこまで歩きつづければならないのだろうか年ごとに積み重なっていく重い過去の記憶を背負いながらこれからどれほどさまよいつづければならないのだろうか私が再び根を下ろしとどまれる場所はあるのだろうか／象よ」

第三の歌

真っ赤な嘘のような青い空
今日も飛んでいるよグラグラと
エンジン不調 煙を吐いて
不揃いな翼 ちぎれそう
ガムテープ ベタバタ
金魚のマーク ピカリ
行かなくちや 行かなくちや
日暮れまでには 行かなくちや

まるで莫迦みたいな丸い月
今夜も飛んでいくよ フラフラと
燃料切れたら ペダルをこいで
気休めの風船 括りつけて
歯車 キコキコ
ゆるんだネジ ポロリ
行かなくちや 行かなくちや
夜明けまでには 行かなくちや

モーターのフロント係と彼

「鍵だ十七号室パーキングからは離れているがプールには近い有料テレビはつないでおくかい？」
「なにが見られる？」

「二十四時間ニュースかポルノ」

「つながないでいいどっちにも興味がない」

姉と「執事」

「弟は行ってしまったしばらく戻って来ないでしょうあなたの仕事もこれでおしまいです」

「インタビュアの約束があります」

「あの人ももう来ません弟と一緒に行ってしまいました」

「取材は終わったのですか？」

「おそらくまだでしょう私はまだなにも話してはいません私の話を聞くためにはとても長い時間が必要です」

「仕事を途中で投げ出してあの人は行ってしまった」

「弟が誘惑したのですこれまでも何度かそんなことがありました弟はこれからあの人をとてもひどい目に会わせるでしょうでも仕方ありませんあの方は自分でそれを望んだのです」

／ 駅まで連れて行って下さい私は目が不自由なのです」

「知っています今日までの給料をもらえますか」

「お金は一銭もありませんすべての支払いはあの方がする約束でした」

「残念ながら駅までご一緒出来ません私の仕事は終わりましたあなたがおっしゃる通りです」

放浪者たち（ツグミとツバメとハチドリ）

「あの人たちはいつも同じ質問ばかりするお前たちはどうしてひとつの土地に住まないのかどうしてそうやって出かけて行ってしまうのか」

「言い寄ってくる男たちだってみんなそう俺がお前を救い出してやるなんて言っちゃって」

さ」

「まるで私たちが悪いことでもしているみたい」

「私らは誰かに無理やり放浪させられているわけでも追われて逃げてるわけでもないのにな」

「一度くらい自分たちの方がおかしいんじゃないかと考えてみたらいいのにさ
そんな奴らはいないのかね」

「まあいいねあっちの法律にや住む家を持たないのは犯罪であるってちゃんと書いてあるんだよ」

「あの人たちは一生自分のお墓の上で暮らすのね自分のお墓の上に生まれて自分のお墓の

上で恋をして自分のお墓の上で抱き合って自分のお墓の上でお産をする」

「お墓の上であくせく働いてお墓の上で病気になってお墓の上でおしまいさめでたしめでたし」

「自分の墓の上で男とやるなんて恥知らずもいいとこだよ」

「いちばん始まりはどこだったのかしら遠い昔あたしたちは東の方からやって来たってあの人たちから聞いたことがあるけど」

「東はお陽さんが昇ってくる方角だからねあいつらなんだかんだと言っても腹の底じゃ私らを怖がってるんだよ」

「時々石を投げたりするのはそのせいなの？」

「そうさまさかお陽さんに石は投げられない」

モーターのフロント係と妻

「サロンの壁の電球が切れてる」

「そうかい」

「三日前から」

「知ってる」

「冷蔵庫の音がうるさくて眠れないってさつき九号室から苦情の電話があった」

「ああ」

「プールの水も一週間替えてない」

「ああ」

「ケーブルテレビの請求書」

「あそうだな」

「四カ月分たまってる」

「だけどまだ映ってるまったく今シーズンのフォーティナイナーズはどうかし

てやがる心配するな明日の朝にはきっちり片づけるサロンの電球を取り替えて
冷蔵庫の修理とプールの掃除だ水もすっかり入れ替えるケーブルテレビも心配
いらぬ十七号室の支払いはカードじゃなくて十日分まとめて現金だこっちへ
来いよ一緒にテレビを見よう」

「毎晩毎晩フットボールよく飽きないもんだ」

「ゲームセットだ有料テレビを見よう」

放浪者たち（ハチドリとフクロウとモズとツグミとツバメとカワセミとオウム）

「王は考えた音楽もなしにワインを飲むのは許しがたい行いだ王は隣の国の王
に使者を遣わせた」

「巧みにリユートを演奏する男と女たち一万人をこちらに送っていただきたい」

「隣の国からやって来た一万人のリユート奏者に向かって王は言った」

「お前たちによく肥えた広々とした土地と小麦と牛を与えようお前たちはその
土地を耕し小麦と牛とを育てるがよいそのかわりわが国の貧しい者たちがワイ
ンを飲む時音楽を演奏してやって欲しい」

「一万人のリユート奏者たちは誰一人王の言いつけをまもらなかった彼らは働
きもせず音楽も奏でずただ毎日小麦と牛を食べて遊んで暮らした王からもらっ
た小麦と牛は一年ですっかり無くなってしまった」

「怒った王は新しい命令を下し彼ら全員を肥えた土地から追い払った」

「ロバを連れてその背中に家財道具の一切を乗せて歌をうたい柔らかな弓をか
きならしめて

身をたてよ国中を旅してまわり高貴の者下賤の者の楽しみのためにうたえ」

「彼らは尋ねる」

「異国の古文書に記されたこの物語は本当か？」

「私らは答える」

「はいはいまったくその通り」

「すると彼らは満足する」

鳥の神官とイクチオルニス（と横たわるヘスペルオルニス）

「夜中の一時マンションの扉を叩く音がしました相手をたしかめないうで扉を開

けたのはいつでも私はそうしていたからです扉を叩く人がいれば私はいつでも鍵を開けます病院や教会の扉とおなじですデリバリー・ピザの配達人の制服を着たこの人が立っていました『このマンションの最上階にある部屋はここだけですか』この人は礼儀正しくとても丁寧な言葉づかいで私に尋ねました『そうですよでもうちではピザは注文していません』わかっています配達ではありません少し休ませていただきたいんですぼくはいまたぶん人を殺してしまいましたた疲れています』私が扉を閉めてしまったらこの人には行くところがない『いいですよでも一時間だけ二時には同居人が帰ってきます』私はこの人をキッチンに案内して椅子に座らせました自分の両手や服についたまだ完全にはかわききっていない血で部屋や家具を汚さないようにこの人は注意深くふるまってくれましたキッチンテーブルでこの人は水を一杯飲んでからシーフード・ミルフィーユと炭焼きチキテリとマヨじやがとガーリック・マスターの四種類を一緒にしたクワトロ・ジャイアンツというピザパイのラージ・サイズをひとりで食べましたその間私はこの人からなにも脅かされたりしなかったし怖い思いもひとつもしませんでしたこの人はピザを食べ終えると洗面所で長い時間かけて手を洗いましたそれから着ている服を全部脱いで裸になると三十九階にある私の部屋のベランダから夜の空に飛んだんです」

「飛んだのか？」

「飛びました」

「お前のいまの話が全部作り話だったとしても私は信じることにしよう／なにか望みはあるか？」

「名前をつけて下さいこの人は私の名前を知らないわたしもこの人の名前を知りません」

「お前にはイクチオルニスという名前をやろう一万年前の小さな海鳥だイクチオルニスは

鳥としてはじめて自由に空をはばたいた」

「この人は？」

「ヘスペルオルニス一万年前の大きな海鳥」

「飛べたんですか？」

「泳ぎはうまかったと学者たちは推測している」

「空を飛べたんですか？」

「誰よりもそれを願っていた鳥だ」

私（と彼）

私は神様を信じないけど神様はたくさんいる私が勝手にどんどんつくるから地下鉄の神様はいつでも居眠りする私をまもってくれるフライパンの神様はホットケーキを焦がさないキーボードの神様は「削除」のところにて時々私に忠告する煙の神様に会いたくて毎朝一本だけ煙草を吸うポケットの中の神様は大切なものをしょつ中隠す私を誘惑するのは耳の後ろの神様からかうのは脇の下神様慰めてくれるのは右手の中指の神様モーツァルトを聞くと六百二十六人の神様を思い出すしシャワーを浴びながらうたうダイエットの神様をたたえる讚美歌だつてあるとても汚い言葉の讚美歌だからいまは歌えないけど

弟とインタビュア

「新聞を読む男／年寄り／ビールを飲みながら議論する三人の男／三人ともまだ若い／メニューを指さして注文する女／若い／背中を屈めて注文を聞く給仕／まだ五十にはなっていない／長い手紙を書いている女／若くない／コーヒーを飲む男とそばで自分の髪の毛をいじっている女／男は二十代後半女の方もつと上」

「私たちはどう見えているんだろう」

「誰も見ていないぼくたちのことは／背広にスニーカーのビジネスマン／品のいいコート姿の老夫婦／警察官／ペーパーバック・レデイが立ち止まる／ギター・ケースを抱えた女の二人連れ／紫色のセーターを上手に着こなした背の高い黒人の女／犬を連れた髪の毛の薄い太った男／目の前にいる他人のことを声に出して言ってみると少し安心するね」

「なぜ？」

「これ以上は連中とかかわらなくてもいいように思えるだろう？」

「みんな靴をはいている裸足の人はひとりもないねえここもやっぱり待合室なのかな？」

「ああでも屋根がない」

鳥の王と物売り

「あなたには翼があるけれどもあなたはもうはばたくことは出来ない小舟は暗い湖をただよっている」

「ランプを灯せ」

「ランプはないあなたは力なく小舟に横たわり錆びついた銃の撃鉄を起こして空を狙う」

「友よ」

「小舟とともに湖をただよう何万通もの開封されなかった手紙を思い出しながらあなたは語りかける」

「鳥の王国の戦士たちよ」

「たくさんの真実の言葉が書かれていたかも知れない読み手を失った手紙はおびただしい数の不動産や月賦販売の健康器具のダイレクト・メールにまぎれて誰にも見分けがつかないあなたの身体は半分腐りかけている」

「聖なる炎に身を投げる者たち」

「指先に力をこめてあなたは銃の引き金を引く小さく揺れる小舟の波紋がかすかに湖を渡っていく腐食した銃の引き金が折れる」

「もつとも崇高な感情は憎しみと怒りの中にある恐れるな予言者の伝える神もまた憎み怒りたもうものだ」

「あなたは銃を離し胸のポケットを探る砕けたビスケットを指先でたしかめて口許に運ぶ」

「奢れる大地が引き裂かれる時天空は無限の闇に連なる鳥の戦士たちよお前たちの憎しみと怒りを翼にかえて最後の戦に飛び立つのだ」

「湖はどこまでも広く海原のよう周囲に岸の影さえ見えないあなたを乗せて小舟はただよう開封されなかった何万通もの手紙がまるで護衛の船団のように小舟のまわりに浮かんでいる」

旅行者と小石を拾う老人

「宿にカメラを置いてきたみたいでもその方が良かったカメラを持っていたら

きつとあなたを撮ったでしょう一緒に記念撮影なんかしちゃったかもしれない」
「あなたはまだこれから何度もきれいな花を咲かせるよ」
「写真に写すと忘れてしまふんです憶えているのは写真に写っている光景だけでこの暑さとか道端の匂いとかあなたの声とかきつと忘れてしまふ」
「もう一度象になれたらなんて思ったことは一度もないね」

彼

「固い鉛筆の芯を尖らせて定規に当てて線を引く百センチ百分の一の図面だったら百メートル千分の一だったら一キロだ『コンピュータは使わないの？』『手書きが好きなんです簡単な図面だったら時間も早い』製図板に向かい一本一本息をつめて正確に線を引く煉瓦積みの職人のことを思う彼らはもう何千年も前から同じ方法で煉瓦を積んでいる図面が百分の一ならば百メートルの壁千分の一ならば一キロの壁だ手書きだろうとコンピュータの図面だろうと彼らの仕事に変わりはない百メートルは百メートル一キロは一キロひとつずつ煉瓦を積み上げていくだけパートタイムで勤めた建築事務所の仕事は給料は安かったけれど気に入っていた製図板に向かっていれば誰とも話をしなくていいまかされていたのはほとんどが配管の図面でちよつとしたパズルのような楽しみもあった建物の壁や床や天井の向こうに人には見えないところにパイプを配置する上水下水電気空調ボイラーその他いろいろパイプにはそれぞれ特徴があつて太さも違えば材質も違うパイプは無理なく合理的に美しく配置されなければならぬ配管の美しい建物は美しく生きる朝学校の祈りの部屋で仲間たちと過ごしたあと事務所に行つてまず鉛筆を削る三十本その鉛筆を使い切るまで仕事をして下宿に帰る二年がかりで卒業論文を仕上げた論文の題名は『危機にさらされた古都アレツポ―ある東洋イスラム都市の発展』」

第四の歌

思い出の曲がり角（いつでも）

青い犬が吠える（いまも）

乾いた町と遠くの煙

洗濯物が風に舞う

誰がいたのかいなくなったのか

笑う子供の声もなく

誰が奪って 奪われたのか

風と砂と火薬の臭い

思い出の残り火が（いつでも）

青い部屋を照らす（いまも）

葡萄の種とガラスの破片

脱ぎ捨てられた靴ひとつ

誰が許して 許されたのか

窓辺の花はとうに枯れ

誰が愛して 愛されたのか

風と砂と火薬の臭い

放浪者たち（ハチドリとモズとツバメ）

「石を投げるんじゃ駄目だよ棒で引っぱいてやるんだよそうすればあいつらは逃げて行ってしまふから棒がなければ蹴っ飛ばす蹴っ飛ばせなければ髪の毛を引っ張る髪の毛を引っ張れなければつねるつねれなければ噛みつくんだそれも出来ない弱虫は道に寝っころがってぶたれておいで子供の頃から喧嘩のやり方はみっちり教わったもちろん子供たちにも教えるさ」

「私らはひとりで何役もこなす踊ったり歌ったり道路工事もやるいかけ屋籠売り物乞いそれから占いそのたんびに服も髪の毛もすっかり変えてしまふ相手の期待通りの恰好をして期待通りにふるまうのさそうすりや大抵はうまくいく占いだって信じるよ」

「私たちは向こうがどんなに立派な恰好をしてたってそれだけじゃ信用しない人は見かけじゃわからないもんねお巡りだけは別だけどうんと昔は熊を連れていた熊の芸はとても人気があった」

旅行者とイクチオルニス

「ふーんあんた鳥なんだ」

「つていうか鳥の祖先」

「あんたはなんとかいいう鳥の祖先であたしは花盛りのサラの木かどっちでもいいけどさ部屋片づけてね家中の鉢植え全部枯らしちゃってるしあんたあたしの旅行中一度も掃除しなかったでしょうこれじゃ荷物も開けられないよ」

「夜中の二時よ明日にすれば」

「留守中変わったことは？」

「なんにもかな／うんなんにも」

ガイドと「執事」

「シャツター押してもらえますか？」

「ええ」

「この石の塔を背景に」

「逆光であんたの顔が影になる」

「構いませんお参りですか？」

「いや」

「ありがとうございます」

「カメラ」

「差上げます」

「え？」

「私のカメラじゃありません私は旅にこれから出ますもうこの町へは戻りません」

「だったら私も一枚シャツターをお願いします」

「いいですよ」

「私はこのサラの木の下がいい／すいませんもう一枚」

「映画俳優みたいだ」

「変ですか？」

「いいえサラの木によく似合う」

姉

「母は屋敷中のダイヤモンドをすっかり飲みつくしてしまった私には誇り高く

死ぬ術がありません私に残されていた方法はただひとつ自分の手で自分の目を焼くことだけででした私が何年生きたとしてももう二度と燃え上がる町を見ることはないでしょう」

小石を拾う老人と鳥の王

「郵便配達はやりがいのある仕事だった三日三晩山道を歩き通して山の向こうの村にたっ

た一通の手紙を届ける手紙の中身はむろん知らない知っているのは宛名に書かれた場所に手紙を待っている誰かがかならずいるということだけだ十五の時から仕事を始めて六十年の間いまましいこの足が思うようにのことをきいてくれなくなるまでわしはそうやって一日も休まずに郵便を配達した一度だけわしが象になったあの不思議な一週間だけは別にして／手紙を届けに行って追い払われるような目に会ったことはいっぺんもないねそれどころかわしが手紙を届けるとみんなとても嬉しそうに『ありがとう』と言ってくれるんだ郵便配達は『ありがとう』という言葉を誰よりもたくさん聞ける仕事だった」

「なにをしている？」

「なにもここは私の寢床です」

「墓守か？」

「いいえ」

「ここは王家の墓だ私もやがてここに埋葬されるだろうお前の座っている石の板には私の

名前が刻ませてある」

「長いことここに暮らしておりますお墓だとは知りませんでした」

「出て行け」

弟とインタビューア

「人間は一人ひとりみんな違っているある者は大きくある者は小さい／ある者は戦い方を知っているしある者は逃げ方を知っている」

「あなたは？」

「ぼくは戦い方も逃げ方も知らない」

「でもいまはわたしと一緒にいるお姉さんから逃げた」

「姉はたったひとりの身寄りです」

「またあそこに戻るつもり？」

「戻る必要はないぼくはまたきつとどこかで姉と出会います」

ヘスペルオルニスと鳥の神官

「どのくらい眠っていたんだろう」

「目覚めた者はみなそう言う誰も自分の眠りの長さを知ることとは出来ない／言葉を読みな

さい目覚めたお前は言葉を読む」

「読めません」

「読みなさい」

「読めません」

「読め／創造主たる主の御名において」

「最後の時はあらかじめ知らされるだろう最後の時が近づくと同じ主張を持つ者が二手にわかれてたがいに争い大乱闘となり三十人もの予言者があらわれて勝手に神の使徒だと名乗りを上げ昼と夜の長さが等しくなり知識は失われいたるところに叛乱が起こり殺人がしばしばおこなわれ富が増してみちあふれ施しも物を差し出してもそんなものはいらないと手を払いのけられ人びとは高い建物を建てまた墓のかたわらを通る時はそこに葬られた人の代わりになりたいと望み太陽は西から昇り誰もが信仰を抱くようになりけれども祈りも善いおこないもなくその信仰は役に立たない予兆は東の大地の地滑りであり予兆は西の大地の陥没であり黒い霧が沸き上がり飢餓は日照りによってではなく降りつづく雨の洪水によって引き起こされる」

「最後の言葉は『水』／時は来たれりいと白き水鳥一羽混沌の地より天に向かいてはばたけり」

教授

「二年前にアレッポで投函された絵はがきが今日届けられた差出人の名前にはおぼえがなかったがおそらく以前に私の『都市建築史』の講座をとっていた学

生だと思いう口数の少ない真面目な学生だった絵はがきといつても絵のかわりに
いままで見たこともないような文字がびっしりと書きつらねてあるだけの奇妙
な絵はがきだった通信欄には『危機にさらされた古都アレッポーある東洋イス
ラム都市の発展』という論文の題名のようなものが一行だけドイツ語でなぐり
書きしてあった」

第五の歌

米売り 糠売り 藁売り 粃売り
牛売り 豚売り 山羊を売る

山羊糞 豚糞 人糞 馬糞

見るだけ只だよお釣りはないよ
ヘイヘイ ブラックマーケット
バイバイ ブラックマーケット

安いのメッキだ瑪瑙は本物

東の絹から 西の麻

蛇なら黒焼 鸚鵡が笑う

やだよ生きてる鯛の頭
ヘイヘイ ブラックマーケット
バイバイ ブラックマーケット

抜け道 坂道 のぼれば下るよ

孫の土産に飴買って

冥土の土産に姐ちゃん買って

真珠の豚だぞ 見たことあるか
ヘイヘイ ブラックマーケット
バイバイ ブラックマーケット

放浪者たち（ハチドリとフクロウとモズとツグミとツバメとカワセミとオウム）

「誰かはいたけど誰もいませんでした神様のほかはだあれも」

「大金持ちの商人に娘がいてねその娘は自分が通っている学校の女の先生をとでも慕っていたんだとさ」

「その女の先生は娘の家の財産に目をつけてね娘をそそのかして母親を大きな蜂蜜のかめの中に突き落として殺させたんだよ」

「そうして娘に言ったのさ／もみ殻を頭に振りかけてランプの上で振るんだよもみ殻がはじけてパチパチいうだろうそれから頭に虱がついたのに誰も櫛ですいてくれないとお父さんに言っごらん」

「娘は言いつけ通りにした商人は娘の世話をやいてもらうために継母が必要だと思っごらんとう女の先生と再婚した」

「ある時不思議なことが起こってね蜂蜜のかめの中から一頭の黄色い雌牛が出てきたんだよ雌牛は死んだ母親の生まれ変わりだったんだけど誰もそれには気がつかなかった」

「継母になったとたんに女の先生は娘にとでもつらく当たるようになってね食事は腐ったパンばかりだし黄色い雌牛の世話も糸つむぎの仕事も全部娘に押しつけてその上糸つむぎの道具も渡さなかったんだそれで糸をうまくつむげないと娘を叩いて折檻した」

「娘が寝床で泣いているとね黄色い雌牛がやってきて残った綿を全部食べてしまったんだよ娘が驚いて叩こうとしたら黄色い雌牛は糞のかわりにきれいにっむいだ糸を尻から出したのさ」

「次の日もまた次の日も雌牛は綿を食べてはっむいだ糸を出したところが三日目に強い風が吹いてさ出来上がった糸が全部深い井戸に落ちてしまったんだよ」

「娘は本当に困っごね途方に暮れていると黄色い雌牛が言ったのさ」
「仕方ないね井戸の底まで糸を取りに行きなさい井戸の底には年取ったお婆さんがいるから失礼しますときちんと挨拶をして木綿の糸を取りにきましたと言いなさいお婆さんに頭の虱を取っご欲しいと頼まれたらあなたの頭は私の頭よりもきれいですと言っご断りなさい」

「娘が井戸の底に降りてみると本当に年取った婆さんがいて娘の挨拶と話を聞くと自分の

部屋へ入れてくれたのさ」

「部屋の中は宝石でいっぱいだったけど娘は木綿の糸だけを取るとねお札に部

屋の掃除をして梯子をのぼって帰ろうとした」

「すると下から婆さんがガタガタと梯子を揺する娘が宝石を盗まなかったか確かめようとしたんだねでも娘はなんにも盗んでいなかったからいくら揺すられてもなんにも下には落ちなかった」

「婆さんは感心してこの子の額に月がはりつくようにと祈ってさ娘がやっと地上にたどりつくと顎には星が輝くようにとまた祈った」

「娘は額には月顎には星が輝いてそれはそれは美しくなったけれども黄色い雌牛は人に見られない方がいいと言って娘の顔に布を巻いてすっかり隠してしまつたのさ」

「話はこれでおしまい／雀はとんで行ったつきり」

物売りとモーターのフロント係と妻

「鍵はありますけど待っても無駄だと思いますよ／ねえ」

「ああたしかに十日分前払いでもらってるけど十七号室は二日目からずつとからっぽだ」

「よくあるんですようちは外れだけどこはガジノの町ですからねすつからからんに巻き上げられてフケちやうお客が」

「あいつをたずねてきたのはあんたで五人目だなんかあったのかい？」

「部屋を見えますか？ 見るだけなら鍵あけますけど」

「いやいい」

「なにか伝言は？」

「ない／絵はがきあるか？」

「生憎だがうちは観光ホテルじゃないんでね」

「あいつは二度とここへは戻って来ない」

私と彼

「ぼくはここには居ないのかも知れない」

「ここ？」

「君が見ているここ」

飛行機のコックピット？

「それは大した問題じゃないこのコックピットにはとにかく誰かが座っていないければならないとえそれがぼくだったとしてもそんなに不思議なことじゃないでもぼくはここには居ないのかも知れない君は『見る人』だと言ったよねそこからなにが見える？」

言いたくもない最悪の朝最悪の青空最悪の飛行機最悪の瞬間だから私はあなたに話しかけた

「なぜ？」

私はよく晴れた朝の青空が好きだった

「君もそこには居ないかも知れないと考えてみたら？」

私はここに居るここにいてあなたを受け入れる

「受け入れる？」

私はあなたを受け入れる私は強姦はされない

「ぼくを憎んでいるね」

あなたは？

「古いアレッポの町を切り裂く灰色の高速道路は石工や煉瓦職人がつくった道じゃないあの道は真っ直ぐに君たちのこのビルまでつながっている」

あなたは憎んでいる

「そうだぼくは憎んでいる」

私は憎まない／あなたは兵士兵士はいつも誰かに憎しみを利用されているたとえ敵の兵士だったとしても私は憎まないだって私は兵士じゃないから憎まないであなたを受け入れる私は間違えたくない私は間違えない／あなたは間違えた／それだけ

2003年4月4日初稿／劇団黒テント第49回公演 上演テキスト

2003年5月22日改稿／雑誌『せりふの時代』掲載

2016年6月28日改稿／『虚空文庫』掲載

2021年2月2日改稿／日本劇作家協会戯曲デジタルアーカイブ